



TITLE:

# 京大東アジアセンターニューズレター 第640号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第640号. 京大東アジアセンターニューズレター 2016, 640

ISSUE DATE:

2016-10-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/216941>

RIGHT:

2016 年 10 月 10 日発行 第 640 号

## CONTENTS

「中国経済研究会」のお知らせ.....	2
アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ.....	3
恐山探訪記 小島 正憲.....	4
【中国経済最新統計】 .....	12



## 「中国経済研究会」のお知らせ

---

2016年度第5回（通算第59回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりましたので、ご案内いたします。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時 間： 2016年10月18日(火) 16:30-18:00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下1階

みずほホール AB

テーマ： 「人民元国際化のプロセスについて」

報告者： 蓋艶梅(北京行政学院副教授)

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行いますが、講師の都合等により変更する場合があります。2016度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4月19日（火）、5月17日（火）、6月21日（火）、7月19日(火)

後期：10月18日（火）、11月15日（火）、12月20（火）、1月17日（火）

（この研究会に関するお問い合わせは劉徳強（[liu@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:liu@econ.kyoto-u.ac.jp)）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）



## アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ

---

主催

京都大学東アジア経済研究センター

共催

東京大学ものづくり経営研究センター

東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

後援

京都大学東アジア経済研究センター支援会

### アジア自動車シンポジウム 2016

# 新興国における部品現地調達を考える

—部品国産化ライフサイクルを一つの視座として—

■京都会場 2016 年 11 月 5 日(土) 13 時

京都大学経済学部三番教室(法経東館 2 階)

■東京会場 2016 年 11 月 7 日(月) 13 時

京都大学東京オフィス(新丸の内ビルディング 10 階)

#### 13:00-13:20 挨拶

東京大学ものづくり経営研究センター ディレクター 新宅 純二郎  
東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点長 丸川 知雄

#### 13:20-14:40

問題提起: 部品国産化ライフサイクル 京都大学 経済学研究科 教授 塩地 洋

#### 14:40-15:10

サプライチェーンの複雑化と深層の現地化 東京大学 経済学研究科 教授 新宅 純二郎

#### 15:30-16:00

日系サプライヤーの現地化基本戦略 立命館大学 経営管理研究科 准教授 佐伯 靖雄

#### 16:00-16:30

現地 2 次サプライヤーの技術能力—深化を制約するか 桜美林大学 経営学研究科  
教授 井上 隆一郎

#### 16:30-16:50

総括コメント 東京大学 社会科学研究所 教授 丸川 知雄

#### 16:50-17:00

閉会挨拶 京都大学 経済学研究科 准教授 田中 彰

#### 17:10-18:30

懇親会 参加費 2000 円(支援会会員は無料)

参加の御申込は、塩地 [shioji@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:shioji@econ.kyoto-u.ac.jp) 宛に、①会場名、②氏名・所属、③懇親会出欠を御連絡ください。シンポジウムの参加費は無料、懇親会は 2000 円です。ただし支援会会員は懇親会も無料です。

東京会場は定員 90 名、京都会場 200 名です。お早めにお申し込みください。

なお東京会場は会場が小さいため、御申込は支援会会員のみとさせていただきます。

支援会入会につきましては塩地までお問い合わせください。

## 恐山探訪記 （附.仮説：「恐山は姥捨て山だった」）

03.OTC.16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

先週、死後の世界を垣間見ようと思ひ、日本三大霊場の一つとされている恐山を訪ねてみた。青森空港から、むつ湾を左手に見ながら、車の少ない平坦な道路を、約3時間走るとむつ市に着く。この地は、かつては原野であり、人間が住める環境ではなかったが、明治維新の時、強制移住させられた会津藩士の手によ



って見事に開拓され、現在の姿になったと言われている。恐山は、そのむつ市から、急カーブの多い山道を30分ほど上ったところにあり、訪れた人は、まず三途の川に出迎えらる。それを渡ってしばらく進むと、広大な駐車場に着く。そこには、立派な総門があり、一般にその中が恐山霊場と呼ばれている。車を降りると、周辺には硫黄の臭いが強く立ちこめており、それだけで恐山の異様さを感じさせられる。ここは正式には、恐山菩提寺という曹洞宗の寺院であり、約1200年前に慈覚大師円仁によって開かれた霊場である。麓のむつ市ですら、明治維新までは原野であったことを考えると、円仁大師が開基された時は、この地は人跡未踏で、霊場という名にふさわしく、死者が集う場所であったと思われる。なお今回は菩提寺の宿坊に泊まり、夜や早朝の恐山を体験してみた。翌日、俗に恐山の奥の院と言われている仏ヶ浦に足を運んでみた。

### 1. 恐山三態

#### ①白昼

菩提寺の開山期間は5月1日から10月末日までであり、冬期は開山していない。大祭典は7月20日から24日。開門時間は朝6時から夕方6時まで。





本尊は延命地藏菩薩。恐山の霊場は総門内にあり、500円の入山料を払って入る。ひっきりなしに観光バスが訪れており、入山料収入も馬鹿にならないと思われる。

総門からまっすぐに立派な参道があり、途中の左側に本堂が、突き当たりに地藏堂がある。珍しいことに、参道の左右には湯治場（右側に男湯、左側に女湯）があり、参拝客は自由に入湯することができる。お湯は青濁色で、適温であった。



恐山と言えば、「イタコの口寄せ」がもっとも有名だが、イタコは大祭のときしかいないという。したがって、どうしても死者を呼び出してもらい、対話したい人は大祭のときに訪れなければ、それは不可能である。私は対話してみたい死者がいるわけではなかったが、イタコさんがいればそれを体験してみたいと思っていた。やはり一人もいなかったのも、残念ではあった。なお、このイタコさんたちは菩提寺とは関係がなく、普段は青森や八戸に住んでおり、大祭当日、出張してきて菩提寺周辺に小さな小屋を作り、「口寄せ」を行う。そこには毎回、お客さんが列をなして待つほどだという。この「イタコの口寄せ」は戦後になってからの風習のようである。もともと下北地方では、「人は死ねば、その魂は恐山に行く」と言い伝えられており、それが「イタコの口寄せ」とつながって、恐山に行きイタコに頼めば、死者と再会できるというストーリーになったようだ。

恐山の霊場には、地藏堂の左前横から入る。そこからすぐに地獄が始まる。そこには、あちこちから硫黄ガスと共に蒸気が吹き出ており、奇怪な岩がむき出しになっており、しかもそこかしこに参拝客の手で多くの小石が積みあげられた小山があり、まさに異様な光景が広がっている。さらに随所に大小さまざまなお地藏さんが置いてあり、それらは手ぬぐいで頬かむりをされ、側にはわらじが置いてある。また道脇には小さな石に名前が書いて、無数に置いてある。それ



らは参拝客が持ち込んで置いていったものだという。最近では大きなお地藏さんを持ち込む人もあるようで、年々、その数が増えていき、寺側も管理に困っているらしい。水子供養のためと言われる風車が無数にあり、その派手な色が目立つ。なお、そこかしこに、「まむし注意」、「熊出没注意」という看板があ

る。

観光バスで訪れる人たちには高齢者が多く、ガイドに連れられて、霊場内の最短コースを足早に歩く。個人で訪れている人たちは、お祈りをしながら、丹念に歩く。無間地獄、血の池地獄、賽の河原などを過ぎ、ほぼ中間地点に極楽浜がある。そこはその名にふさわしい綺麗な砂浜であり、眼前の宇曽利湖は澄んだ水を満々とたたえている。そこに20人ほどの観光客がおり、ガイドが、「対岸に向かって、大声で亡くなられた会いたい人の名前を呼ぶと返事がありますよ。いっせいに呼んでみて下さい」というと、男性たちは大声で叫んだ。ところが不思議なことに、女性たちはほとんど声を出さなかった。すると、ガイドが笑いながら、「やはり今回もそうでしたね。大体いつも、男性は奥さんの名を叫びますが、女性は旦那さんの名を呼びません。きっと女性は、今さら亡くなった旦那さんに出てきてほしくないのでしょうかね」と話した。とっさに女性たちの間からけたたましい笑い声が上がった。私はそれが現実なのだろうと思い、美しい景色を見ながら、そこにしばらくいたが、個人客で大声で叫ぶ人はいなかった。

さらにさまざまな地獄を通して、やっと参道にたどりつく。所要時間は1時間ほど。地獄には観光客や参拝客が大勢いたので、怖くはなかったし、霊的なものを感じることもまったくなかった。だがその異様な光景は、恐山の名にふさわしいものだった。

## ②夜間

先日読んだ「恐山」(新潮新書)に、菩提寺には宿坊があると書いてあったので、今回はそこに泊ってみようと思い、予約の電話を入れた。大祭の時期ではなく、団体客もなかったので、すんなり受け付けていただけた。ただし宿坊にはホテルや旅館と違い、いろいろな「きまりごと」があるので、それに従うようにと電話口で言われた。その「きまりごと」とは、「1. 夕食は午後6時、朝食は7時半。2. 浴衣は夕食後着用のこと。3. 朝のお勤めは午前6時半。4. 夕食・朝食時の飲酒は禁止。5. タバコは指定の喫煙場所のみ。6. 大浴場も外風呂も午後10時まで。7. 館内の消灯は午後10時」などであった。この中では、「朝のお勤め」だけが気になったが、これも勉強だと思い、予約をした。宿泊料は1万2千円なり。



宿坊は菩提寺の境内にあり、それは予想外に立派な建物で、きれいでひろび

ろとしたロビーがあり、ずらりと個室が並んでいた。寺院の大座敷に雑魚寝だと思っていた私には、これは想定外だった。ただし、室内にテレビはなく、携帯電話も圏外で通じず、もちろん WIFI もなかった。外界との通信手段はロビーにある緑の公衆電話だけであり、そこはまさに現世とは隔絶した世界だった。しかたがないので、私は夕食前に温泉に入ることにした。まだ明るかったので、境内の湯治場には行かず、宿坊内の大風呂に入ってみた。大風呂も温泉であり、大人数が一度に入ることができるような大浴槽がしつらえてあった。そのときはだれも入浴しておらず、私が大浴場を独占使用した。ちょうどよい湯加減で、私は外の地獄の景色の延長を見ながら、のんびりと浸かった。

午後6時に、「食事の時間ですから大食堂に集合してください」との館内（宿坊内）放送があったので、大食堂に行ってみると、そこにはずらりと椅子と食卓が並んでおり、ざっと数えて250人ほどが、一度に食事できるようになっていた。しかしその日の宿泊客は4人だけだったので、その広い大食堂の片隅で、固まって食事をいただいた。食事前に、まず僧侶のたたき拍子木に合わせて、「五観の偈」を唱和し、その後に「精進料理」をいただいた。約15分後、

再び僧侶といっしょに、「食後の偈」を唱えて食事は終わった。その後、僧侶が宿坊の「きまりごと」や明日の天気などを話してくれた。私は僧侶に、「境内にある湯治場は、10時までならば入ってもよいですか。夜、地獄に行ってもよいですか。灯はついて 있습니까」と聞いてみた。僧侶は、「地獄に行ってもかまいませんが、灯はついていませんので、足下に注意してください。もちろん10時までならば、湯治場は入れます」と答えて下さった。つまり「地獄に行くことは禁止」とは言われなかった。予約時には、宿坊が境内にあり、夜間に地獄に出入りできるなどとは思ってもみなかったので、私は懐中電灯を持ってこなかった。ちなみに私は、海外に出かけるときは、不意の停電に備えて懐中電灯を必ず持って行くことにしている。

夜9時、ひとまず境内にある湯治場に行ってみようと思い、宿坊を出た。まだその辺りには街灯があり、明るかったが、まったく人気のない境内は、やはり不気味だった。その雰囲気気押されて、湯船に浸かる気にはならず、扉を開けて中を覗いただけで帰った。参道の中程から昼間に行った地獄の入り口を見てみたが、真っ暗で、気味が悪かった。それでも、せっかく死後の世界を覗きに恐山まで来たのだから、夜の地獄に一步でも足を踏み入れてみたかったし、霊に身近で接してみたかった。しかしやはり怖かった。私は山門の側に座り、30分ほど、地獄の入り口をながめながら、逡巡し続けた。その間に、霊が写り込むかもしれないと思い、写真を撮ってみたが、霊は写っていなかった。ま



たその暗闇の中から、霊の気配を感じることもなかった。だんだん消灯時間も近づいたので、私は、「懐中電灯もないし、まむしが出るかもしれないので、今回はあきらめよう」と、自分に言い聞かせ、宿坊に帰った。こうして、私は死後の世界を覗く絶好の機会を失った。部屋の布団の上で、私は夜の地獄に入らなかったことを後悔し、自分を意気地無しと思い、深い自己嫌悪に陥った。私には、霊に崇られて死んでもよいという覚悟もできていたし、どうせ死ぬのだから霊に取り憑かれてもかまわないとも考えていた。それでもやはりなぜか怖かったのも、夜の地獄には入れなかった。まだこの世に未練が残っているからなのだろうか。そんなことを考えながら、それでも私は、夢枕に霊が立つかもしれないと期待し、眠りについた。しかし、残念ながら、夢の中には、それらしき霊は登場しなかった。

### ③早朝

朝6時、「起床の時間です」という館内放送で、私は目を覚ました。30分後、「朝のお勤めが始まりますので、地蔵堂に集合して下さい」という館内放送が流れたので、私はすぐに長い廻廊を足早に歩いて、地蔵堂に向かった。早朝の境内は清々しく、昨晚とは打って変わって、霊などの気配をいっさい感じさせなかった。境内の静けさやさわやかさを感じながら廻廊を歩いているとき、私の心には、ムッソルグスキーの「禿げ山の一夜」の最終部分のメロディーが浮かんできた。そこでムッソルグスキーは、魔女や妖怪の乱舞する夜が明け、一転してさわやかな早朝が訪れる様子を、見事なメロディーで表現している。私が爽快な気分で廻廊を歩いていると、ふと私の目に、廻廊脇の湯治場へ、4～5人の老人がタオルを片手に談笑しながら入っていく姿が飛び込んで来た。そのとき、私の脳裏に、突然、「恐山は姥捨て山だったのかもしれない」という考えが浮かんだ。

地蔵堂でのお勤めには、宿坊に泊まった4人と、朝6時の開門と同時にやってきた数人の参拝客が参列した。僧侶の読経と共に、宿泊者のご祈祷が行われ、参列者も合掌し頭を垂れた。通常のご祈祷料は3～5千円と設定されており、宿泊者の場合はそれが宿泊料の中に組み込んである。そう考えれば、宿泊料はビジネスホテルなみで高くはない。その後、本堂に場所を移し、そこでもご祈祷が行われた。

朝7時半から、昨晚と同じ大食堂で、「五観の偈」を唱和し、精進料理の朝ご飯を食べ、「食後の偈」を唱え、朝食終了。午前8時ごろから観光客が団体で現れ始め、そこはいつもの騒々しい恐山に戻った。

## 2. 恐山の奥の院：仏ヶ浦

斧のような形をした下北半島の刃の部分に当たる所に、俗に恐山の奥の院と呼ばれている仏ヶ浦がある。仏ヶ浦は絶景と言われており、恐山を訪れた観光客の多くがそこに行くようである。恐山から仏ヶ浦へは、いったんむつ市まで下りて、そこから佐井港まで国道を2時間半ほど



走り、港からフェリーに乗り、海上から行く。フェリー代は往復で2400円、所用時間は1時間半ほど。高速船に30分ほど揺られて行くと、奇岩群が見えてくる。船着き場があり、そこで下船し、しばらく歩くと、山の手には地蔵堂がある。ここの本尊は、恐山と同じく地蔵尊で、恐山の大祭の時だけ御開帳されるという。このあたりの事情が、恐山の奥の院と呼ばれる所以だろうか。

海辺には、白緑色の奇岩が連なっており、みごとな景色である。奇岩の間を縫って、15分ほど歩いて行っても、まだその絶景が続く。さらに5分ほど進めば、極楽浜という名の白砂の浜辺に着くということであつたが、フェリーの出航時刻が迫っており、そこへ行くのは断念した。この浜辺の散策を堪能するには、約1時間が必要だろう。地蔵堂のところまで戻ると、来たときには気がつかなかったが、そこには山に向かって脇道が伸びており、「駐車場へはここから」という看板があつた。私は極楽浜を見ることができなかったのが心残りであり、佐井港に戻ってから、車で仏ヶ浦に行ってみることにした。さきほどの看板を見て、きっと車でも行けると思ったからである。



車で仏ヶ浦に向かうと、途中に展望台があつた。しかしそこからは下へ降りる道がなかった。さらに数分、車で走るとそこに、「仏ヶ浦駐車場」という看板があつたので、その駐車場に入り、心を踊らせ、下山道路に向かった。ところがそこに、「仏ヶ浦まで600m」という看板が掲げられ、そのかたわらには、「どうぞ自由にお使いください」と書いた木箱があり、いっぱい木の杖が入っていた。それらを見て、私はたじろいだ。それでも下の方から、80代とおぼしき老女が杖をついて上って来るのを見て、自分も負けてはいられないと思い、杖を借りて、降りることにした。

途中までゆるやかな坂道が続いていたが、あと400mの看板から階段に変わり、浜辺に着く頃には、私の膝が痛さで悲鳴を上げるほどだった。それでも

午前中に来た浜辺に着いたので、いそいで極楽浜に向かった。ところが運悪く、先ほど来たところまで進むと、潮が満ちてきていて、そこから先には進めなかった。ズボンの裾をまくって進もうと思ったが、どうも膝上まで深さがありそうだったので、断念した。つまり午前中に、駐車場から600m降りて来ないと、極楽浜は拝めないということである。結局私は極楽浜を見ることができなかった。残念だった。帰りの階段はきつかった。

### 3. 「恐山」(南直哉著 新潮新書)の検証

前々回の読後雑感で、南直哉氏の著書「恐山」を取り上げ、近日中に恐山に行き、検証してみたいと書いておいた。今回、さっそく恐山を訪れることができ、南氏の記述がほぼ正しいということを確認できた。

著者の南氏は、恐山を管轄する曹洞宗菩提寺の住職代理であり、曹洞宗の本山永平寺で20年間も修業を続けた立派な僧侶である。そして南氏は縁あって恐山菩提寺に勤めることとなった。その後、彼は持ち前の進取の気性で、恐山についての種々の現象に立ち向かい、それを解明し、達者な文筆力でそれを世に知らしめたのが、本書である。本書で南氏は、「“恐山のイタコ”はいない」、「恐山の心霊現象はあるとも言えない、ないとも言えない」、「恐山はパワーレススポットである」、「恐山というのはあくまで器なのです。それは火口にできた土地である。きれいな湖があつて温泉が出る。そこにはこの世とは思えない異様な風景が広がっている。その風景に魅かれて、やがて多くの人が集まってきた。それから何か信仰のようなものが芽生えた、と考えるのが自然でしょう」などと書いている。

・「“恐山のイタコ”はいない」という南氏の記述は、実際に、私がこの目で確認した。たしかにイタコはいなかった。

・南氏の「恐山の心霊現象はあるとも言えない、ないとも言えない」記述については、今回、恐山で心霊現象を体験することができず、未確認だから、それは適当であるとししか評価できない。もし私が夜の地獄に踏み込んでいれば、ひょっとすると霊に遭遇できたかもしれないが、怖くてそのチャンスを逃した。

・恐山の地獄を巡っていてわかったことは、多くの観光客や参拝客が、ここでは死者の鎮魂を祈っており、死者と再会しパワーをもらうことを望んでいるわけではなかったことである。その意味では、南氏の「恐山はパワーレススポットである」という記述は理解できる。

・さらに南氏の「恐山というのはあくまで器なのです。それは火口にできた土地である。きれいな湖があつて温泉が出る。そこにはこの世とは思えない異様な風景が広がっている。その風景に魅かれて、やがて多くの人が集まってきた。

それから何か信仰のようなものが芽生えた、と考えるのが自然でしょう」という記述についても、その異様な風景をこの目で確認できたので、これまたよく理解できる。また自然の異様な風景の中に、人間が人工の無数のお地蔵さんや風車を持ち込んでいるわけで、まさにここには人間の創り出した幻想、つまりここに来れば死者とも会えるし、死者の魂を鎮めることもできるという人間の身勝手な願望が表出している。もちろん「イタコの口寄せ」も、その幻想をふくらませることに、大きく寄与したと言えるだろう。宗教とは、このようにして人間の心をつかんでいくものだということが、この恐山からはよく理解できる。つまり南氏の「それから何か信仰のようなものが芽生えた、と考えるのが自然でしょう」という記述が、ぴったり当てはまる。

#### 4. 仮説：「恐山は姥捨て山だった」

私は、恐山が姥捨て山だったのではないかと思う。恐山は円仁大師が開基される以前から、下北半島に住む人たちの湯治場だった。そこには疲れ切った体を休めようとする多くの人や、病を治そうとする人たちが、集ってきたに違いない。今でも、がんを治すために、温泉の岩盤浴を利用する民間療法があるが、昔は麓の村の老人たちが、病を治すために恐山の温泉に浸かり、きれいな白砂の浜を見ながら、極楽往生を願ったことだろう。そしてそこで、命を終えていく老人たちも多かっただろう。働き詰めで疲れ切った体を、人生の最期に、温泉に浸かってゆっくり過ごす。恐山は、老人にとって極楽であっても、地獄ではなかったのではないか。麓で死んだ人も、多くの友人たちと共に最期を過ごした恐山に集うことを望んだであろう。その結果、村々には、「死者は恐山に行く」という言い伝えが残ったと考えるのが自然ではないだろうか。

現在、多くの人々は、死者と対面することを願って恐山へやって来るが、そこを自らの死に場所と定めて来る人は、ほとんどいない。ところが、昔の恐山は老人の死に場所であったと考えられる。老人たちは、恐山へ嬉々として上ってきたのである。老人たちは、恐山で静かに死んでいくこと自体が、村にとっての大きな貢献であることをよく理解し、自己を犠牲にすることを最期のお勤めと心得ていたに違いない。その意味でも老人たちは喜んで恐山に集ってきたに違いない。恐山は老人たちの桃源郷だったのかもしれない。私は、恐山の湯治場と極楽浜、そして早朝のさわやかさを体験して、地獄は現代人の幻想の結果であり、その実態は極楽だったのではないかと思うに至った。なお、恐山の入り口である三途の川を渡る橋には、「当寺ではポケモンGO 禁止」という看板が立てかけられていた。昨今の若者たちにとって、恐山は地獄か、はたまた極楽か。



## 【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸出 増加率 (%)	⑧ 輸入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
8月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016年												
1月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7
3月	6.7	6.8	10.5	2.3	11.2	299	11.2	-7.4	26.1	4.0	13.4	14.7
4月		6.0	10.1	2.3	10.1	456	-2.0	-10.5	21.4	2.9	12.8	14.4
5月		6.0	10.0	2.0	7.4	500	-4.7	-0.1	43.6	-4.8	11.8	14.4
6月	6.7	6.2	10.6	1.9	7.3	479	-6.1	-9.0	8.5	4.4	11.8	14.3
7月		6.0	10.2	1.8	3.9	502	-6.4	-12.9	-3.8	-6.2	10.2	12.9
8月		6.3	10.6	1.3	8.2	520	-3.2	1.4	13.2	0.5	11.4	13.0

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、( )内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。